

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	太田 克也
主 論 文 題 名 :				
中世和歌の文献学的研究——歌書の機能と本文——				
(内容の要旨)				
本論文は、中世和歌における歌書を対象として、その機能と本文の問題について、文献学的手法により考察したものである。ここでいう中世とは、平安時代後期から室町時代までの時期を指すが、その中でも特に、平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての、いわゆる院政期を主たる対象とする。この時代の和歌を特徴づけるものに、「題詠の一般化」と「歌人層の拡大」があり、これら二つの事象を支えたのが「歌書」であると考えられる。ここでいう歌書とは、和歌とそれに関連する著作を指し、作品原本のみならず、後世に作成された伝本をも含めている。その歌書の特質を明らかにするため、本論文では「機能」と「本文」に注目して論ずることにした。機能とは、歌書が読者や享受者に対してどのような働きをしていたのか、ということである。これは作品原本であれば作者の執筆意図の問題となり、個々の伝本であれば後世の人々がその作品に対して期待した役割の問題となる。本文とは、歌書がどのような本文を持っていたのか、ということである。これを作品原本におけるものとして捉えればあるべき本文の追求・復元の問題となり、伝本を含めた総体におけるものとして捉えれば本文の変容の問題となる。こうした問題意識の下、二部八章の論考によって本論文を構成した。 第一部「機能」では、歌書の機能の問題、すなわち歌書がどのような働きをしたかという点を扱った。その際には、作品成立時の状況や享受の場の復元に重点を置くことを心がけた。 第一章「初期南都興福寺の和歌的環境——藤原教長の初学期の背景——」では、南都興福寺の和歌的環境を取り上げた。僧侶歌人の和歌活動の検討を通して、都から地理的に距離のあった寺院文化圏における和歌文化の水準を考察した。そうすることで、その和歌文化を支えた歌書の存在を浮かび上がらせることを試みた。その端緒として、約半世紀に及ぶ和歌活動を展開した藤原教長の初学期に注目した。まず教長の初学期を示唆する史料である自筆の古今集奥書を検討した。そこには教長が若年時に宗延・勝超という人物と和				

歌について話し合っただけで学んだことが記されていた。この二人は著名な人物ではないので、権威付けのためではなく、事実を語っていると考えられる。この二人は南都興福寺の僧侶であるので、教長はそこで初学期を過ごしたと想定できる。次いでこの想定に基づき、宗延・勝超の伝記と和歌活動について検討した。この二人は法相宗の僧侶で、出自は高くないものの、長く修行を続けて労を積んでいた学僧である。このうち勝超は、興福寺別当を務めて歌人としても名を知られた高僧である永縁の高弟であった。宗延も勝超とともに永縁の主催した歌合に参加したことがあった。宗延・勝超ともに南都の永縁のもとで和歌活動を展開し、僧侶でありながら歌人としても認識されていた形跡がある。さらに歌人としての宗延・勝超の力量についても検討した。二人の詠歌手法は和歌的伝統に即したものであり、彼らが和歌を十分学んでいた節が窺えると同時に、南都の和歌的環境の豊かさを物語っていた。また宗延は歌学にも通じ、研鑽を積む過程で接した語を実作に取り込む意欲を有し、いくつかの歌語に対して自説を唱えることもできていた。都の中央歌壇の歌人と比較すると優れているとはいえないが、勅撰歌人となるなど歌人としての存在は認められていた。以上の検討から、教長の歌人形成には南都の豊かな和歌文化が影響し、それが長きに亘る和歌活動を促したと考えられた。都から地理的に距離のある南都において、豊富な和歌知識を備えた好士が出現し、和歌文化を形成することができたのは、様々な歌書が流入して学びに利用されていたからであろう。これは歌書が空間を超えた事例であると言える。

第二章「正治奏状の諸本と伝来」では、御子左家の成立に関わる史料である正治奏状を取り上げ、諸本の特徴や本文の性格を中心に考察した。伝来や享受、伝本の生成状況に着目することで、伝本と本文を再評価しようとした。まず現存する諸本を調査し、本文の比較を中心に検討した。伝本は計七本を見出すことができ、本文が有する特徴から「完本系」と「抄出本系」に分類することが適当である。各本の本文を検討すると、さらなる下位分類が必要な程の差異は見られなかった。抄出本系本文は奏状本来の趣旨とは異なる意識のもとで抄出されており、それに伴う異同も生じている。そのため完本系本文の方が優位に立つと判断される。ただし完本系の本の中にも、誤読や意改による異文が存する本があるので、利用する際には注意が必要である。次に本文の性格を理解するのに資するため、享受の様相と現存諸本の祖本について検討した。正治奏状は南北朝時代に、俊成の末裔である冷泉家の人によって関東へ持ち出されたことがあるらしく、当地の歌詠みに利用された形跡があった。そこで引用された本文は、現在見られる本文と概ね一致している。また室町時代には、一条家で行われた写本作成活動に冷泉家の所蔵する典籍が利用されており、正治奏状もその際に冷泉家から貸し出されて写本が作成され、それが現存諸本の祖本に当たると考えられる。この点、本文の信頼性は高いと言えるが、一方でそのときの写本作成者の筆跡が判読し難い字であることから、その後転写される際に誤読による異文が生じた可能性もあることも考慮に入れておく必要があることがわかった。相伝の秘本が何世紀もの時を経て、人

々の目に触れるようになり、享受されていた様は、歌書が時間を超えた事例であると言えることができる。

第三章「家長日記の書誌学的考察」及び第四章「家長日記成立論——家長本新古今和歌集との関係——」では、新古今歌壇の様相を描く家長日記を取り上げた。伝本が抱える問題を解決した上で、作品の成立事情や伝来の状況を考察した。書物としての歌書という観点から検討することによって、作品の意義を捉え直すことを試みた。まず第三章では、諸本の書誌的な問題を扱った。まず冷泉家時雨亭文庫本を検討し、同本が従来考察に利用されていた宮内庁書陵部本の親本であることを確定した。これにより伝本の問題を冷泉家本に遡らせることができ、冷泉家本の形態の検討から錯簡等の問題を解決した。なお一部は冷泉家本の親本以前の段階で生じたものであり、現状での解決は不可能であることも判明した。続いて家長日記の享受史を探索し、家長日記が和歌所の本として歌道家に伝わり、外部に出回ることがなかったため、中世期に流布しなかったと推測した。またそれが江戸時代前期頃から次第に転写されて、伝本群を形成し始めたと考えた。そして冷泉家本が現存諸本の祖本なので、他本による校訂ができず、意改によって本文を定めるしかないことを明らかにした。次に第四章では、この成果を受けて作品の成立面の問題を考察した。従来作品の表現方法に注目して研究が行われてきた。しかしそこには成立論の重要な要素である作品の読者の存在を考慮していないという問題があった。そこでこの点につき考察を加えた。まず想定読者の範囲を定めるために、日記の冒頭部にある記事を、同時代史料を用いて検討した。日記冒頭部には、家長が幼少期に誰の世話になっていて、いかにして宮廷に出仕することになったかが述べられている。これまでの研究ではこれらの記事の内容をそのまま受け取っていたが、改めて当時の史料に基づいてみると、この記事には当時の通例と異なった記述や家長の個人的な人的関係などが描かれており、そういう事情を知り得る者でないと理解できない記事であることがわかった。そのため読者の範囲は親族などの私的な関係にある者に限られると考えられ、具体的には家長の子孫を読者として想定した。次いでこの想定 of 蓋然性について、日記と子孫との関わりの点から検証した。家長の子孫の伝記を考証したところ、子孫も家長と同じく宮廷に出仕し、かつ勅撰和歌集の編纂事務に関与していたことがわかった。これらの職務は専門性が求められるものであったので、職務に関する資料を代々相伝することが一般的であった。日記の内容も併せて考えると、この日記は子孫が円滑に職務を遂行できるよう、家記に准ずる資料として家長が執筆したものと考えられる。これは日記の成立時期が子息の誕生と相前後していることや、日記の伝来過程からも支持される。そして子孫の断絶後は、日記はそれが有する情報の専門性から、歌道家内で秘匿され、流布しなかったことも判明した。このように家長日記は、当初は家記のような役割を担っていたが、歌道家の内部で伝領されるようになって、和歌所の編纂実務に関する資料として扱われるようになった。これは歌書が意義を変えた事例であると評価でき

る。

第二部「本文」では、歌書の本文の問題、すなわち歌書の本文はどのようなものであるかという点を扱った。特に書物としての検討を行うことに重点を置いた。

第一章「治承三年十月右大臣家歌合の第二類本文」では、院政期に成立した治承三年十月右大臣家歌合を取り上げ、現存する伝本を整理した上で、本文の検討を行なった。これまで活用されてこなかったコレクションの伝本に焦点を当てることで、その本文を評価し直そうとした。先行研究によれば、本歌合の本文・伝本は大きく二つの系統に分けられている。第一類には版本歌合部類やいくつかの近世写本があり、どのような本から派生したものかはわかっていない。第二類には宮内庁書陵部蔵本ほかの写本があり、いずれも東常縁を経由したことを示す奥書を持っている。ただしこれまでの研究では、第一類と第二類の本文がいかなる関係にあるのかということが明らかでなかったり、分類の基準となる箇所性の認定に揺れがあったりしている。こうした問題を考えるときに、第二類の本文が完全な形で提供されていないことが障害となっている。これまでに提供されている本歌合の本文はいずれも第一類に属する伝本を底本としている。一部、第二類本の伝本で対校しているものもあるが、全体像が示されているわけではないので不十分である。そこで諸本を概観した上で、第二類に属する伝本を翻刻して、主要な異同を提示することとした。今回確認できた伝本は十三本ある。このうち第一類は、結局のところ歌合部類と小沢蘆庵収集本の二つの関係が問題となる。第二類は国立歴史民俗博物館蔵本が室町時代の書写に係り、その他にも古態を残すような写本が見られる。本文については、第二類の本文は基本的には同一であるものの、異同がかなり多い。単純な誤写もあるが、親本の時点で判読困難であったものを無理矢理読んだことによるものも散見する。そのため善本を定めるのが難しいが、本奥書の年時に近い古写になる歴博本を底本として翻刻し、主要な異同を示した。

第二章「熊野懷紙・熊野類懷紙の模写・模刻——國學院大學図書館所蔵「久我家文書」及び国立歴史民俗博物館所蔵「聆涛閣集古帖」所収史料——」では、一品経懷紙・春日懷紙と並んで珍重される熊野懷紙・熊野類懷紙を取り上げた。新出の模写・模刻史料を紹介し、筆跡を中心に検討することで、これらの史料価値を明らかにすることを試みた。源家長・後鳥羽院・藤原信綱に関する史料について、筆跡を中心に検討したところ、いずれも原本を写したものであると判断できる。新出の歌を含んでいたり、従来知られていた本文との異同があったりするだけでなく、原本の形態や伝来を窺えるといった特徴があることから、史料価値は高いものと判断される。

第三章「道助法親王家五十首の基礎的考察——伝本分類・本文・合点——」では、鎌倉時代に成立した定数歌である道助法親王家五十首を取り上げた。諸本を精査して分類した上で、本文や合点などの基礎的な問題を考察した。とりわけ諸本の書誌的な面に注目することで、本文の性格だけでなく、従来見逃されてきた情報をも明らかにしようとした。まず諸本を分類しつつ概観し、次いで本文の特徴と合点の分布状況について見た。まず諸本は書式の違いを基準として分類することができる。その基準は三つあり、それによって四つの系統に分類した。第一系統は「良宗案」で始まる長文の考証を末尾に持つ点が特徴的なもので、近世の公家や大名家の所蔵になる本が多い。第二系統は室町時代の古写本や本奥書から同時代の本を祖とするものがある系統で、田中本も属し、合点の長短を区別している本が目立つのが特色である。第三系統は他出との照合を行った形跡のある系統で、歌順の乱れがない点で安定している。第四系統は和歌本文以外の箇所が他本よりも省略傾向にあるもので、中には群書類従本のように他本との取り合わせである本もある。次に本文は系統ごと、伝本ごとに様々な様相を呈している。第一系統は田中本に対する異文が少なく、穂久邇文庫本等が比較的よい本文を有している。第二系統は田中本の誤りを正すことができるが、系統内で本文の相違が目立つところもあり、複数の伝本を比較参照する必要がある。第三系統は個々の伝本独自の異文は少ないものの、系統特有の異文が目立つ。第四系統は全体的に田中本とはやや距離のある本文で、個別の本文にも問題のある伝本がある。そして合点は諸本で分布が錯綜している。最もよさそうなのはやはり田中本であるが、それだけでは誤りや過不足があるので、早稲田大学図書館蔵本等も用いて決定する必要がある。最後に現状の最善本と考えられる田中本を翻刻し、従来用いられていた伝本との簡校を行なった。

第四章「三条西実隆「享禄四年三月春日法楽百首」の本文——雪玉集定数歌部との関係——」では、三条西実隆に関する和歌史料を取り上げた。近年新たに公開された史料について、自筆か否かの判断を下した上で、本文の性格を検討した。その際には、写本と版本それぞれの本文に目を配りつつ、家集との関係を中心に考察することで、史料の意義を明らかにしようとした。本史料の筆跡や本文を検討したところ、作者の自筆とは認め難い点が複数見られた。そのためこれは家集に関連する一写本として捉えることが妥当であると考えられる。さらに検討の対象を他の伝本にまで広げると、当該史料は単純な誤りに起因する独自異文が目立つことも判明した。しかし現状では、家集の伝本研究が進展していないことから、本文を考える際の資料としての意義を認めることができる。なお本史料を翻刻し、主要な異同を一覧した。

以上の検討から、様々な時代や場における多様な歌書の働きと、歌書が持つ本文の作品ごとの様相を明らかにした。

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	☐ "KOU" ☐ "OTSU" No. *Office use only	Name:	Katsuya Ota
Title of Thesis: 中世和歌の文献学的研究——歌書の機能と本文—— Texts and Their Functions : Poetic Writings in Medieval Japan			
Summary of Thesis: This doctoral dissertation aims to elucidate the functions of poetic writings (<i>kasho</i>) and the characteristics of these texts through a philological study of medieval Japanese poetry. The term "<i>kasho</i>" designates works related to vernacular verse (<i>waka</i>), such as poetry collections (<i>kashū</i>) and literary treatises (<i>karonsho</i>). Since <i>waka</i> was transmitted in the form of <i>kasho</i>, clarifying the attributes of each <i>kasho</i> is of utmost importance. By "functions," I refer to the author's intent in writing the work and the meanings readers found in it. By "texts," I mean the original form of the work and how it has transformed over time. The present thesis discusses these two interrelated issues across eight chapters, grouped into two parts. Part I presents cases in which <i>kasho</i> played various functions across different eras and settings. In Chapter one, examples underscore how various agents carried and used <i>kasho</i>. Moving beyond Kyoto, the influx of <i>kasho</i> from the capital popularized <i>waka</i> in Nara, especially in the area of Kōfukuji, where learned monks also became active poets. Chapter two explores the inheritance of <i>kasho</i> by focusing on the <i>Shōji sōjō</i>, a document passed down within the Reizei family that became widely read during the Muromachi period. Chapters three and four demonstrate changes in the function of <i>kasho</i>. The <i>Ienaga nikki</i>, a diary written to pass down the compilation process of imperial anthologies to the author's descendants, gained prominence among later poetic householders as a reference book for editorial practices at the Bureau of Poetry (<i>wakadokoro</i>). Part II explores several features of <i>kasho</i> texts. Chapter one focuses on the <i>Udaijin-ke utaawase</i>, noting discrepancies and transcription mistakes in all extant copies, which trace back to the same archetype that itself contains textual inaccuracies. Chapter two examines the <i>Kumano kaishi</i>, highlighting how Edo-period reproductions preserve both form and content of the now-lost original document. Chapter three discusses the <i>Dōjo gojushu</i>, for which I reconstructed a relatively accurate text by collating various copies. Chapter four investigates Sanjonishi Sanetaka's personal poetry collection, the <i>Setsugyokushū</i>. Manuscript copies tend to display a more reliable text than printed versions, although errors are present, necessitating emendation via textual criticism. This analysis reveals that <i>kasho</i> served a variety of functions and that diverse texts co-existed during the medieval period.			